●金沢大学ワンダーフォーゲル部OB会・会報誌「やまざと」VOL.19――山小屋・ベルクハイム・マイホーム号

やまざと

特集　ぼくらにとっての「山小屋」考

近畿KUWV-OB会の歩み

～～8期 篠島益夫徹底レポート～～

最新・住所録 完全保存版（2005年1月）

リスのコーヒー屋さん「ブナブレンドはいかが？」

21期　竹中　敏（イラストと物語）

晩秋のある晴れた日、いつもの森へ出かけた。昼下がり、目的の小屋までの歩きも残りわずかとなった。

目印のブナの根元に、見覚えのない踏み跡が森の中へ続いているのが見えた。チョッとさまよってみようと思い、その踏み跡をたどってみた。

キツネやテンが歩いた跡だろうか？しばらく行くと大きな倒木が苔むしていた。ここまで、けっこう歩きつづけてきたので、休憩することにした。

テルモスを取りだし、カップに暖かいコーヒーを注ぐと、ゆらゆらと立ち上る湯気があたりにひろがった。なんとなく眠くなってきたので腰をおろした。倒木に背をもたれているうちに、記憶が遠のいていくのがわかった。

夢を見た。

大木の根元に、大きな鈴がかかったドアのコーヒー屋があった。なんとも香ばしい香りに誘われてそのドアをくぐった。カウンターには蝶ネクタイを付けたリスがお客を待っていた。

「とてもいい香りだね。」と言った。

「このコーヒーはうちの特製だよ。ウラヤマのドングリをローストしていれたんだ。クヌギやブナの実をブレンドしたものもお勧めだよ。」

「じゃあ、そのブナをブレンドしたものを1杯たのむよ。」

しばらくすると、もうもうと湯気の立つカップを差し出してくれた。

「やけに湯気がでるなあ。いくら？」と聞いた。

「クルミ3個です。」

「クルミ？」

ポケットをさぐると、なぜかクルミがごろごろしていた。

ころころっとクルミが床にこぼれた。

「あ、いけない。」

ごそごそと床を手探りでさがした。

ごそごそ、がさがさ。

コーヒーカップのむこうにゆれる、ふさふさシッポは夢ではない。

「やまざと」VOL. 19　山小屋・ベルクハイム・マイホーム号

〉〉〉 CONTENTS

表紙　リスのコーヒー屋さん——21期・竹中　敏（イラスト＆文）
やまざと　題字——— 23期・中川晃成（毎号イラストに合わせて執筆）

01p　**特 集　ぼくらにとっての「山小屋」考**
02p　建設当時の思い出——6期・合津　尚
03p　二代目山小屋おやじ雑感——13期・吉田穂積
04～05p　ベルクハイムとの付き合い——13期・辰野隆義
06～07p　ベルクハイムの想い出——19期・栂　典雅
08～09p　再会　ベルクハイム——22期・森　恵利子
10～13p　山の開拓者たちを想う——11期・青柳健二
14p　山小屋　温故知新——15期・舟田節子

15p　**メール宅急便「寄 稿」**
16p　半世紀越しの飯豊山——6期・合津　尚
17p　北漢山・トボン山（韓国）山行——9期・山中重夫
18～19p　姿を変えた百四丈滝　15期・上馬康生
20～22p　八ケ岳（赤岳）登山——4期・佐藤秀紀

23～31p　**近畿KUWV-OB会の歩み**——8期 篠島益夫徹底レポート
32～33p　**近畿OB会 晩秋・多紀連山PW**——15期・宇野　潔

34p　**野沢温泉スキー合宿'04　報告記**
35p　**野沢温泉スキー合宿'05　予告記**——11期・青柳健二

36～37p　**やまざと写真館**——8期・柴田勝幸　11期・青柳健二

38～39p　**前田先生 法学部長お祝い会**——21期・栂　睦美

40～41p　**2004年 OB会会計報告**——23期・鳥越伸博

42～43p　**OB一言通信**

44～67p　**最新・住所録 完全保存版**（2005年1月現在）——23期・名倉　均

特 集
ぼくらにとっての「山小屋」考

山小屋の窓から細くたなびく 食当のけむり
道作りの作業を終えて帰り着くベルクハイムは
わが家そのものだった
ヘッドランプのもとで食べるカレーライス
たとえカメムシがアルミの食器に飛び込んできても
「ベルクハイムやから…ね」と、笑って許せた
たまらなく懐かしい場所
ボクの胸の奥の奥には、今でも
「ベルクハイム」という部屋がちゃんと陣取っている

建設当時の思い出

６期　合津　尚

キセキレイ

昭和も遠くなりましたが、昭和３８年(1963年)冬は記録的な大雪でした。この当時には倉谷の集落に多くの人が生活しておりましたが、往来が遮断され社会問題となりこの年に廃村が決定された。

一方、我らがホームグランドとしていた医王山の周辺の民有地では、入山料を取り始める騒ぎとなった（今はどうなっているのか？）。当時のクラブは創設間が無い時期でしたが部員数が多く大変に活気があり、この事件があって常時アプローチが可能な山域と山小屋に対する夢が語り始められました。

このような背景と６期の無謀で授業に飽きた輩が一大決心をし、山小屋建設に動き出したのが３８年頃であったように記憶している。候補地の選定として主たる山の近くで、借地問題が少ない国有林であることと雪崩と洪水の危険が無いこと、交通の便があり街から程ほどに近いこと、建設資材の搬入が可能なこと、更に水場が近いことなどなど。このような条件に合致したのが高三郎山の麓にある倉谷の集落跡であった。

問題の資金はＯＢ諸氏からのカンパと(歴史浅くあまりあてにならず)、白山に素人学生を案内するクラブのバイトなどが主な資金源で、こうした浄財１４～１５万が建設資金であったと思う。資金不足を補うための工夫として資材は現地調達方式とした。まず無料の河原の石で土台と腰壁を構築し、これもタダの砂と小石と水と有料のセメントでコンクリートを作り、建物の主要部は廃村になった民家一軒を市役所から払下げ解体して木材を回収したもの。夏休みの勤労奉仕でオロロと戦いそれぞれ苦労したが、特に合掌作の大きな民家の解体は素人の集まりにしては事故もなく良くやったと今でも感心する。今の時勢なら足場、安全帯、ヘルメット等〃と規制で大変なことだが、それからだんだんと解体が進むと家の住人(ヘビ)が大量に出てきたのには驚いた。

資材不足と豪雪対策で建物は腰壁の上から直にトラス組の三角屋根を被せた構造とした。内部空間は狭くなったが、当時の豪雪のイメージからすればこれしか策が見つからなかった。４０年の卒業の春に雪の中に押潰されない小屋を見たときは安心とともに感動に浸ったことが思い出である。

二代目山小屋おやじ雑感

13期　吉田穂積

石川県内在住の13期が、毎年正月にお決まりの小料理屋で会食しています。8年程前のその場で辰野が「たまには忙しい毎日から離れて、ベルクハイムへ行ってゆっくり休みたい。その為には快適に過ごせるようにしたいし、山小屋整備のお手伝いにもなれば」と言いだしたことから、13期が山小屋作業に関わるようなりました。それ以来多くの人の協力で、水場、トイレ、床張りなど整備ができ、快適空間になりました。

ある時、送られてきた『やまざと』16号を見ていたら「3月から東京勤務となります。よって二代目山小屋のおやじは穂積に頼んで行きます」の文字が目に入ってきた。辰野から舟田さん宛のメールだった。転勤の話は辰野夫妻と我々夫婦が飲みに行ったとき聞いてはいたのだが。「はぁー？」と思ったが東京に行ってしまうんならしょうがないな、というわけで二代目ということになってしまいました。

これまでの山小屋作業で、当初辰野が予定していた重要な整備箇所はほとんど済んでいるので、後は必要に応じた修繕と、少々の楽しみ、便利になるような作業になるかなと思っています。

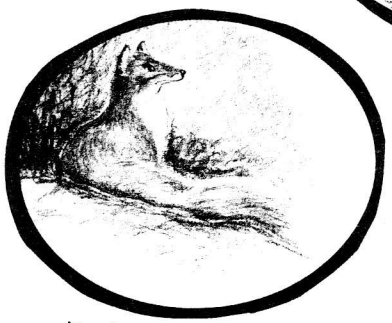
ベルクハイムの履歴を見てみると

- 1964年　初代BH完工
- 1974年　2代目BH完工
- 1987年　床に穴あく
- 1991年　屋根に穴あき床1/3が使用不能
- 1993年　屋根葺き替え
- 1994年　床張り替え
- 1999年　屋根塗装
- 2000年　床張り替え

と10年余りで大修復か、その兆候が現れている。その兆候に適宜対処して、せいぜい一泊程度の修繕作業を楽しみながらやることでベルクハイムが永くもってくれればいうことはありません。

その時々の山小屋作業には、これをやろうという目的はありますが道の補修、草刈、小屋周りの清掃、食当など色々やることがありますので、皆さんそれぞれできることに応じてやって預ければよいのです。また消音水洗トイレが完備していますので、女性も安心して参加してください。山小屋酒場は年2回、5月中旬と9月下旬(変動あり)にやっております。

アオバズク



ホンドギツネ

ベルクハイムとの付き合い

13期生 （山小屋酒場初代おやじ） 辰野 隆義

私がベルクハイムと出会ったのは、1年の新トレでちらっと拝ませてもらったのが最初でした。もちろん泊まらせてもらえる訳もなく、"ワンゲルは山小屋を持っているんだ"という印象だけでした。

そんな山小屋がとても身近になったのは、1年の秋から2年にかけてだと思う。そのころ70年安保で大学は閉鎖状態。金もなく、暇だけある私たちは、よく誘い合い、シュラフと少しの食料を持って山小屋へ行ったように思う。その頃の山小屋は今の様式とは異なり、土台の石積みの上に直接屋根が乗っている様式だったと思う。中には囲炉裏があり小屋前には水場があった。小屋じまいには窓に板を打ち付け、水場からホースを巻きとり、結構大変な作業だった。

こんな懐かしい思い出も、卒業してからしばらくは忘れていた。ところが、20年ぶりくらいでOB会主催の"月見の宴"が山小屋で行われることになり、勇躍参加した。ベルクハイムはあまり使われている様子はなく、小屋の周りも荒れ果てていた。青春の一翼を担ってくれた山小屋も、このままにしておけば数年で倒壊してしまうのではないかと思われた。そこで、金沢在住の13期生3人（大島、吉本、吉田君）に相談し、我々だけで、手弁当で山小屋を整備しようということになった。ちょうどその頃、大島君は初代のOB会長を務めており、そこから舟田事務局長の耳にも入り、OB会の行事 としてやろうということになった。山小屋酒場という名前を付けたのは私ですが、その名の通り気楽に中年オヤジの道楽程度の考えがスタートの基本だった。

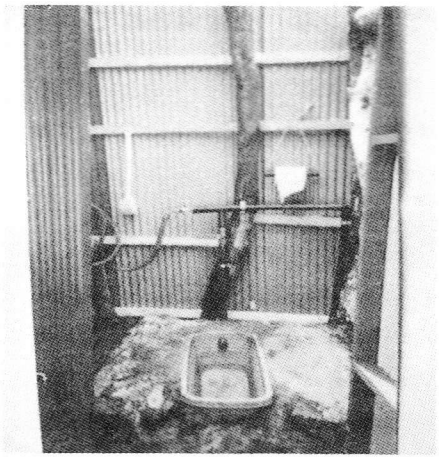
昔、同じ空間を共有した気の置けない仲間が山小屋に集まって、自分のできることをし、夜は酒を飲んで、昔を語り合い、近況を話し合う。なんとすばらしい空間ではありませんか。この空間が少しでも長く、みんなと共有できるようにと、春と秋の山小屋酒場のお手伝いをさせていただいています。

当初の目標は、最終的に"囲炉裏を作ること"でした。囲炉裏というのは直接生活に必要ないけれど、欲しいものということで、補修が一段落したら手掛けようと思ったからです。

まず、手掛けたのはアプローチの整備からでした。登り口の階段を整備し、小屋の周りの溜まりに溜った残材、ゴミを焼却すするなど、外部から取りかかりました。倉谷の古い梁材で昔創った "愁心"の碑（※1）が朽ちてしまっていたので、コンクリートで作り直すことも真っ先に手掛けました。

外周りが綺麗になった後、まず1年かけて水場の整備を行いました。必要なところから優先的に手を付けるという考えです。次は、部分的に腐っていた床の張り替えです。今までの合板より、やはり白木の単板が良いという意見から、150枚余りの白木の板材

を準備しました。この床張りに1年。さらに次は念願の水洗便所の作成にとりかかりました。山から柱や梁になる木を伐り出すところから始まり、組み立て、トタン張り、便器据え付け、コンクリート打ち、配管等、2年をかけて完成しました。



これにより誰でも気楽に山小屋が使えるようになり、ぐっと居住性が良くなりました。その後しばらくは老朽化の対応に追われました。屋根を支えるトラス材の腐食で柱を新設したり、土台のコンクリートのモルタルを補強したり、屋根の塗装替えをしたり、おかげで毎年何らかの作業が発生しました。そして、いよいよ昨年から囲炉裏の作成に取りかかり、今年の春"火入れ式"にまでこぎ着けました。

これで当初の目標は達成しました。しかし、まだまだ気を抜くとすぐに不都合がでてくるし、これからもやらなければいけないことが、いっぱい出てくるはずです。これからも、皆さんの力を貸して頂いて、1年でも長く、ベルクハイムを存続させたいと思っています。

これまで参加してくださった方々、大量の資材をボッカしてくれた現役の方々、それに、参加したみんなの胃袋を堪能させてくれた舟田さん、本当に有り難うございました。私は仕事の都合で 、現在、東京暮らしなので、おやじを吉田穂積君に替わってもらいましたが、できる限り皆さんと一緒に、ベルクハイムを盛り立てて行こうと思っています。これからもよろしく。

※1 愁心の碑：我々13回生がリーダーをした新入生トレーニング（高三郎を使用）で、当時の新入生だった桂君がダムサイト近くで倒れ、そのまま帰らぬ人となってしまった。
そのことを我々は深く心に刻み、2度とこのようなことが起きないようにとの思いを込めて、建設したものです。題字は当時の顧問の松尾先生に、パネルは教育学部の米林先生にお願いして作成していただいたものです。

ベルクハイムの想い出

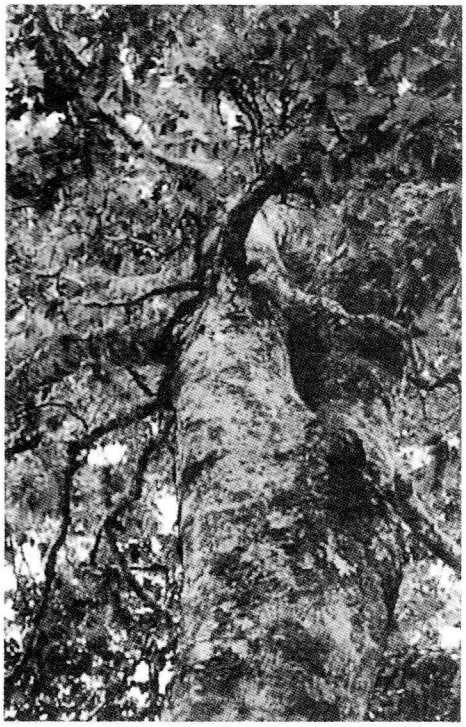
19期　栂　典雅

現在のベルクハイムが建てられたのは1974年、ぼくが現役１年生の夏である。初代のベルクハイムは、新トレのときに見たくらいであまり記憶にないが、旧倉谷の廃屋の材を梁などに使っており、10年経って老朽化したので建て替えるのだと先輩から聞いたことを覚えている。ということは、19期は初代のベルクハイムを知る最後の期だったわけだ。

改築は８月の盆過ぎから９月上旬にかけて行われた。工期を６日間ずつ４期に分け、１期は解体と屋根を支えるバットレスのコンクリート打ち、２期は骨組み、３期は屋根葺きや外装、４期が内装・仕上げといったような工程だったはずだ。

ぼくが参加したのは８月下旬からの３期だった。ダムの水かさが日に日に減り、それにつれてボートの荷揚げ場が遠くなるので、トタン板などの資材を運ぶのに苦労した。それに加えて恐怖のオロロ。最盛期はやや過ぎたとはいえ、炎暑の中、何百というオロロにたかられ、刺されながらの運搬作業はほんとうに辛くて、まるで強制労働を強いられる捕虜のような気分だった。４年生の川端さん（16期）が着ていた白いシャツの背中に、赤いマジックでオロロの絵と「働け！」という文字が書かれていた、などというしょうもないことを覚えている。しかし、後半は屋根が葺かれ、小屋の中で夕食を取ることができたのはよかった。厳しい労働の後のビールやウィスキーが最高だったことは言うまでもない。

以来、ベルクハイムは急速に身近な存在になったのであるが、今にして思えば、犀奥の登山道整備は、ぼくたちが現役の頃に最高潮に達していたのではないだろうか。大門山・奈良岳間の開通にとどまらず、奈良岳から大笠山に向かって道を延ばしていたくらいで、夏と秋の小屋作業（道づくり）には多くの部員が参加していた。ベルクハイムはその拠点であり、見越山北峰下には前進基地として、ワンゲル平（テン場）も整備されていた。[注＊]



ぼくが３年生の秋に「白山ーベルクハイムPW」をやれたのも、こうした背景があってのことで、実際、大笠山から奈良岳へ向かう途中で秋の作業隊と感動の出会いをしている。とどめはベルクハイムでの二十数名による祝宴。翌日、本当は帰りたいくせに、みんなを見送り、もう１泊した（このPWで13泊目！）。なぜ、そうしたのか、はっきり覚えてはいないが、自分を淋しさの極みに追いつめようという、ちょっと屈折した思いがあったと記憶している。

そして、ベルクハイムといえば、同期の高桑を決して忘れることができない。前述のPWで最初に「感動の出会い」をしたのも作業隊長の彼だったし、酒と歌を目的にした「小屋じまい」を共謀したこともあった。それが、ワンゲルOBになって間もない1978年の４月末、地学科の４年生だった彼は卒論の予備調査のために倉谷に入り、行方不明になったのだ。同行していた同期の辻からの連絡で、ぼくは現役４年生の栃尾、松下らと夜の犀川ダムへ向かった。

それから数日間、消防隊員とワンゲル部員・OB、高桑の親族らからなる捜索隊の基地として、ベルクハイムは大きな役割を果たした。しかし、懸命の捜索むなしく、高桑は倉谷川のダム湖底から、ダイバーによって発見されたのだった。

ぼくにとってベルクハイムは、若き日の楽しかったことや辛かったこと、そして切なく哀しい想い出がごちゃまぜになっている。それは、きっとぼくだけでなく、高桑を知る者が共に抱く心情なのかもしれない。

［＊］現在、大門・大笠山間は白山国立公園の登山道として富山県により整備されている。高三郎・見越山間は廃道状態。

再会　ベルクハイム

２２期　　森　　恵利子

ありがとうございました。
ずっとずっと行きたかった、ベルクハイムと高三郎に
何とか無事に行けて本当に感謝しています。
今までにも、チャンスはあったんだけど、
もう一歩踏み出せなくて、
今回、ほんとに行けて良かったなあと思っています。

ベルクハイムも、近くに感じられるようになりました。
すてきな皆さんと過ごし、なおのこと、ベルクハイムの良さがしみてきました。
長い間、「やまざと」でみてきただけだったベルクハイムを、
目の当たりにして、感激です。
カメムシのにおいがしない！（すみません）
屋根、床、トイレ、水場、ランタンや食器やガスコンロなどの備品・・・。
そして、いろり・・・。
ワンゲルの人の手でつくられたんだなあ・・。
自分たちの小屋だから、とびっきり過ごしやすくしようという
思いの詰まった小屋なんだなあ。
そして、誰かが、訪れるたびに、
さらに使いやすくなっていくんだろうなあと思わせられました。
また、私もベルクハイムへいきたいと思っています。
そして、たきびを囲んでビールを飲みたいです。
「～の宴」や「小屋作業」にも行けたらいいなあと思っています。
いつか、ご一緒しましょう。

☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆

今年（２００４年）の５月にベルクハイムと高三郎に行きました。卒業以来、高三郎は３回目です。１度目は職場の先輩と、２度目は夫と行きました。どちらも時間切れでピークに到達できず、高三郎のハードさを再確認するとともに、頂上をなつかしく思い浮かべたものでした。

しかし、それより遠い場所だったのは、ベルクハイムでした。小屋作業の報告等で、次々と姿を新しくしていることは知っていました。行ってみたいなあと思っていましたが、小屋作業や小屋酒場との日が合わなかったり、ためらったり・・・。それの繰り返しで、気が付くと二十数年。なおさら、敷居は高くなっていたのです。

今年職場が変わり、「犀川小学校」へ勤めることになりました。校区地図を見るとびっ

くり。ベルクハイムも、高三郎も、校区ではありませんか。バスの終点「駒帰」の近くにあった駒帰小学校は廃校となり、犀川小学校に統合されていたのです。思いがけない転勤は、ベルクハイムと高三郎に、呼ばれたように感じました。

そして、４月のある日、ドライブがてらにと車を走らせてみると、その道の立派になっていること。「鷹巣トンネル」というトンネルもできていました。どんどん走っていくと、赤い橋。そうだ、この橋で、何度か疲れた体を休めたことがある・・・。などと思い出はよみがえってきます。そして、その奥に、犀川ダムがあり、ベルクハイム、高三郎があるのです。行ってみたいという思いはますます強くなりました。

ちょうどその頃、栂さんからお誘いもらって、ベルクハイムとの「再会」となったのでした。

☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆

帰ってきて、興奮さめやらぬまま書いたのが、上のメールです。

今まで「やまざと」でみていたベルクハイムに自分がいる・・・。とってもうれしい感覚でした。あたたかくどっしりとしたベルクハイムには、たくさんの人の手でつくられ繋がってきた空気が満ちていました。私も・・と思ってトイレの中ではずれていたペーパーをホルダーに取り付けたのですが・・・。残念。そこは、雨の当たる場所だったので、避けてあったのでした。そう簡単には私の手は入れられないぞ。先に来た方々たちのでっかさを思い知った気がしました。

煙は目にしみたけど、囲炉裏の火も人もやさしかったです。
その晩、私は、山の中に帰っていました。

あのベルクハイムで、また、誰かと会いたいなあと思っています。
今度、行けるのはいつかなあ・・・。

言い忘れましたが、翌日登った高三郎は、BH前泊でもやっぱりハードな山でした。学生時代に手に入れ、久しぶりにはいた山靴のビブラムは、ついにギブアップとなり、昔、松下さん（？）がしていたような針金縛り状態での帰り道となってしまいました。助けて頂いたみなさんありがとうございました。

山の開拓者たちを想う

１１期　青柳　健二

数年ほど前から、一泊から三泊程度の山行を復活させた。もっぱら小屋泊まりの単独行である。単独であるのは、マイペースで歩け、気ままに写真を撮ったりすることが可能な唯一の方法だからであり、小屋泊まりは、なにより荷物が少なくて済むからである。ただし小屋泊まりのメリットは、色々ある。相部屋となった山仲間との語らいも楽しいし、最近は小屋の食事も結構美味しくなった。生ビールや本格コーヒーが飲める小屋もある。何より、山小屋そのものが存在として面白い。建物の形にしても、手作りのような小さな小屋もあり、何百人も泊まれる大きな小屋もある。大きな小屋は、何回か増改築され今の姿になったと思うと、その歴史が偲ばれる。小屋の姿そのものに、小屋主の性格が現れている。そして、「この小屋を建てた人物は、なぜこの場所にこの小屋を建てたのだろう？」と思い巡らしてみるのも楽しい。

思うに、山小屋を建てた人物は、その山と共に生き、その山を一番熟知し、一番愛した者であると思われる。ヘリコプターのない時代に、山小屋を造ることは大変な難事業であった。彼らの、強い意志とあくなき情熱、先見性と野心、その山への偏愛、ロマンチズム。山小屋建設者は、必然的に登山道の開拓者でもあり、山の真の開拓者と言えると思われる。

そんな思いが、山小屋物語や山小屋の主の物語への関心となっている。北アルプスの山小屋の場合は、それなりにテキストが出版されているので、出発前に読んでいる。また、岳人や山渓にそんな記事があると、必ず読んで次の山行に組み入れることを考えている。

実は、山小屋とその主への関心は、山都松本生まれで、友人、近所の人、そして親族にその小屋主達がいたからでもある。ここで、そんな方々を紹介してみよう。

まず、針ノ木小屋の百瀬尭君。彼は、高校の同級生である。大町から松本まで電車通学していた。学習院大学卒業後、母の後を継いだ。祖

父が、北アルプス開拓史に名を残す百瀬慎太郎である。若山牧水門下の歌人でもあり『山を想えば人恋し、人を想えば山恋し』の名文を残している。針ノ木小屋は、大学１年の夏合宿に通過しただけで、その後訪ねていない。２００５年の夏山計画に組み入れ、再会を祝いたいと想っている。

燕岳の燕山荘は、家業（陶器店）の取引先であった。松本の事務所に集金に行った事がある。大正１０年に、有明村の赤沼千尋が開設した。気鋭の登山家でもあり、百瀬慎太郎と名古屋の資産家伊藤孝一と３人で、大正１２年厳冬期「針ノ木越え」、翌年冬に「薬師岳ー槍ヶ岳縦走」を企て成功させている。３０人からの山案内人と撮影技師を同行させ記録映画撮影を同時に行うというスケールの大きな登山であり、彼らの夢の大きさと実行力に感嘆させられる。二代目赤沼淳夫は、山小屋の近代化に力をそそいだパイオニアであり、山岳写真家としても知られている。三代目健至は、先代のパイオニア精神と経営センスを引継ぎ、燕山荘を人気の山小屋にしている。２００２年夏に、中学の学生登山以来４０年振りに燕山荘を訪れ、彼のアルペンホルン演奏と山の講話を楽しく聴かせて戴いた。

槍ヶ岳山荘の穂刈家は、実家の隣町の写真屋さんであった。中学・高校時代には撮った写真を現像に行ったものだ。店先に壮大な槍ヶ岳の写真が飾ってあったのを覚えている。初代穂刈三寿雄は、大変なロマンチストである。18歳の時に徳本峠を越え上高地に行き、その美しい景観に魅せられた。23歳で槍ヶ岳山行を計画し、運命の槍ヶ岳に遭遇した。そして、４年後の大正７年２７歳で槍沢に北アルプス南部最初の営業小屋「アルプス旅館」を開設する。さらに大正１０年、赤沼千尋と共に「大槍小屋」を建設。大正１５年には、ついに「槍ヶ岳肩の小屋」を建設した。雪崩で小屋が潰されても、耐えて復活させ、夢の頂きの肩に小屋を建設した執念とパワーには目を見張るものがある。進取の気性に富み独学で写真を物にした。ガラス乾板で山岳写真を撮り、それを上高地の旅館や自分の小屋で売るようになり、松本の家を改築し写真館を始めた。商売のセンスも抜群である。二代目の穂刈貞雄は、小屋を継ぐともに、写真館を継ぎ、山岳写真家として名を成しているのはご承知のとおりである。今は、元商社マン三代目康治が小屋を継いでいる。
今年の夏に３３年振りに槍ヶ岳に行き、初めて槍ヶ岳山荘に泊まった。新館２階の談話室では、穂刈三寿雄のガラス看板写真展を行っており、力強い白黒映像で、８０年以上前の今も変わらぬ山の美しさを鑑賞した。

この穂刈家の隣家で、足袋屋を営んでいたのが山田家であり、アルプス旅館の共同建設者となったのが山田利一である。槍沢に荷揚げするために、大正８年に常念乗越に常念小屋を建設した。さらに、一ノ俣谷に道を通し一ノ俣小屋を建設した。モダンな山小屋で、牛肉のステーキが夕食に出て評判を呼んだと言う。戦後長男

の宏吉兄さんが横尾山荘として引継いだ。今は娘婿の貢さんが運営している。常念小屋は、次男の恒男兄さんが継いでいる。ここで、兄さんと言うのは、実は母方の従兄弟にあたるからである。子供時代には隣町でもあり、良く遊びに行っていた。病気で寝ておられた利一さんの横で、手回しのレコードを聴いた覚えがある。今年、久し振りに横尾山荘に泊まったが、新装の風呂にはビックリした。内装も一新され、伝統の料理も上手く、若いスタッフの応対が気持ち良かった。常念小屋の恒男兄さんは、７０歳を超えた今も現役の小屋主である。スタッフもベテランが多い。大変な話好きで「語り合える山小屋」を経営理念にしている。薄くなった頭を守るためいつも野球帽を被っているこの親父さんを小屋で見つけたら、気軽に話しかけたら面白い話を聞かせてくれるだろう。

そして山田利一の長女良子姉さんと結婚したのが、北穂高小屋の小山義治さんである。この偉大なる開拓者と親族になったことは、私の誇りである。あの北穂高岳の頂上直下に
小屋を建てた伝説の物語は、ご当人が本に書いているので、ぜひ読んで頂きたい。また、一昨年４月に「穂高よ永遠なれ」と言うテレビ番組も放映されたので見られた方も多いだろう。今は、一人っ子の義秀君が継いでいる。私は、この北穂高小屋を「日本一の山小屋」であると自信を持って断言する。あの滝谷のすぐ横に小屋が建っていること自体が奇跡である。３１００ｍの日本一高い山小屋であり、小屋前のベランダからの眺望は完璧である。ここから大キレット越しに見る槍ヶ岳の眺めは、日本の山岳景観のナンバーワンであろう。また、北穂と小屋を愛するスタッフの気配りが行き届き、気持ち良い雰囲気に満ちている。クラシックが鳴り、小屋のスタッフでもある写真家の撮った穂高の写真が飾られた食堂兼談話室では、この場所でしか味わえない至福の時を過ごす事が出来るだろう。この夏３０年振りに、この小屋に泊まった。楽しみにしていた義秀君とは会えなかったが、小屋で職場結婚した早川君の暖かい歓待を受け感激した。義治さんの創った小屋が、変わらず見事に継承されているのを確認し、ますますこの小屋が好きになったものである。

北穂高に登る前に、浅間温泉の小山夫妻を訪ね、昼食を挟んで３時間ほど歓談させて頂いた。８５歳になられた小山さんは、腰がまがり耳がやや遠くなっているも、すこぶるお元気で、９月に長野で催す個展の準備に精を出しておられた。２０年程まえ山を降りられてから、本格的に始めた油絵でも一流の才能を発揮され、銀座の画廊で個展を開くほどの
腕前である。小屋創設５０周年を記念し、画集を発表されている。６０周年にむけて、自伝の執筆を始められたと言う。この日、３０年前に買い求め愛読した著作本に、サインをして頂いた。第二作がどんなものになるか、大いに楽しみである。画集を含め、三冊になるであろう、サイン入りの著作は、私の自慢の宝物である。

小山さんは、今だ自らの足で、年１度は北穂

高小屋に登られると言う。今年も８月末に登る予定だと聞いたが、台風が多発し山の天候が不順だったこの夏は、無事登られただろうか。ここで、紹介した山小屋の創始者たちは、何らかの輪で繋がっている。その輪の先っぽに、自分も繋がっていると思うと、とっても幸せな気分になる。山小屋は創始者から二代目、三代目の時代になったが、それぞれが創始者の志を継承し、それぞれの個性を受け継いでいる。私も、体の動く限り、そんな山小屋を訪ねて山に登りたいと思う。

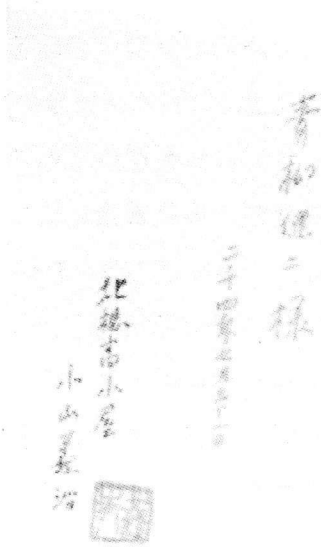
追　記

穂刈家と山田家があった旧六九町（現大手二丁目）は、大掛かりな市街地改修工事のため昔の姿を無くし、商業ビル兼マンションが立ち並んでいる。町内にあった「さくら銀行松本支店」も銀行の合併により廃店となった。穂刈写真館も、今はない。私の実家のあった旧西堀町も街路拡張工事が行われ昔の面影はない。兄が継いだ家業も街路拡張を機に店をたたみ、市に土地を売って、駅の西方に引っ越した。ただ、山田利一さんの生家跡には、従兄弟の中村邦雄兄さんが、音楽喫茶「シンフォニー」を営んでいる。この店で、膨大なクラシックコレクションを聴きながら、コーヒーを飲むのが、松本に帰省した際の楽しみになっている。ちなみに、邦雄兄さんは、３０年程前に廃止された一ノ俣小屋の小屋主であった。松本駅から松本城に向かう道筋から少し入ったところにあり、松本に寄った節は、ぜひ訪れて頂きたい。コーヒーの味は保証します。

［参考文献］

穂高を愛して二十年：小山義治著　新潮社、中公文庫
北アルプス　この百年：菊池俊朗著　文春文庫
北アルプス　山小屋物語：柳原修一著　東京新聞出版社
穂高よ永遠なれ　北穂高小屋物語：ＪＮＮ共同製作番組　青柳ＶＴＲ化

◎私の宝物



山小屋　温故知新

15期　舟田節子

情報に関して、ＩＴはまさに革命。ますますの加速に、個々の習熟スピードが追い付かず、一方、人対人の認知・親睦ペースは、そうそう加速・コード化できるものではありません。さらには少しでも新しい情報を…の価値観は過去を評価せず、個人のキャリアや達成感も、アッというまに「評価をされない過去」に貶めます。共同体における縦意識の維持は、時代に即応では済まない困難を抱えるようになっています。

ワンゲルに話を戻せば、メールマガジンの時代に、部誌ベルクハイムの発行はより難しくなりました。過去は過ぎ去るのみにして、小過去すらが不明、それが加速…。そんな時代に「昔は…」を語る愚かさを思いますが、活字になる機会に、小屋作業への補助金獲得他の経緯を説明しておきます。

ＫＵＷＶの伝統といわれてきた高三郎周辺活動も、平成に入った頃には沈滞化。①有名山岳指向による意識離れ②部の同人組織化による非統率化③山小屋の老朽化④城内キャンパスから移転による環境変化⑤カリキュラム改編による一斉休暇の消失…などの諸因があったようです。

この時代の趨勢への転機となったのは、平成４年晩夏の36期生蒲原君の劒岳死亡事故でした。翌５年①ＯＢ会復活②創部35周年行事の現役・ＯＢ共催③修復募金を経て山小屋大改修…が行われ、７年には①山小屋修復完了②月見の宴③15期桂氏の愁心碑改修。高三郎登山道修復の補助金の話が湧いたのは、その後でした。林ナカオ代表が、公募であって公募でないような補助金話をもちかけてくれたのです。その２日後のＯＢ会役員と現役３回生（当時は38期生）の懇親会にて、「部は慢性金欠、是非お願いしたい」の返事。予算が承認された翌年度、スポーツ振興課課長が５期稲葉さんの同窓で、稲葉さんに同行頂き、また尾崎主査が倉谷出身であったことから、きわめて順調に「補助金をいただいての高三郎登山道修復作業」は復活しました。４年がかりで旧道を修復。新道は、ナカオにも２度応援いただき、修復をみました。

また山小屋酒場は、補助金受給話のその席で、13期辰野さんからの提言とオヤジ志願を頂きました。その後、春と秋の年２回①水場作り②トイレ作り③石垣補修④梁補強⑤根太取り替え、床張替え⑥囲炉裏作りなどを行い、快適空間が生まれています。

すでに、現役時代より多く、高三郎に登り、山小屋ベルクハイムに通ってきました。

いわばすべてがＩＴとは無縁の、人のつながりや、汗、努力の中で進行してきました。山小屋がなければ、どれだけのことが消えていて、替わりに、どれだけのものが得られたというのか…と、思います。

さて、私は万年飯場のオバサンですが、修復メンバーもこのところすっかり酒量が落ち、量より質へと、ボッカ力相応のメニューになりつつあります。春にはボートが使えるロケーションも倉谷ならではですし、中高年登山ブームにも汚染されなかった静かな桃源郷で　す。思い入れだけなら、どこかで挫折していたでしょう。気負いが消えた時にも、残っているもの…それに気付かされる山小屋です。

メール宅急便「寄 稿」

写真寄稿　21期　栂　睦美

モデル（手）21期　大野直子

2004年初夏　ニッコウキスゲが寂しげに咲くある山頂にて

「福井県民は山頂で、ボーボー、バーナーに火を付け、焼き肉をよくやらかす」

「富山県民は、おかずにカップラーメンやメッタ汁なんかを作る」

「はてさて、石川県民は、おにぎりだけでよいのか！（憤慨）」

「いやいや。20期久冨さんなんかがいれば、ワインパーティもありですぞ～」

半世紀越しの飯豊山

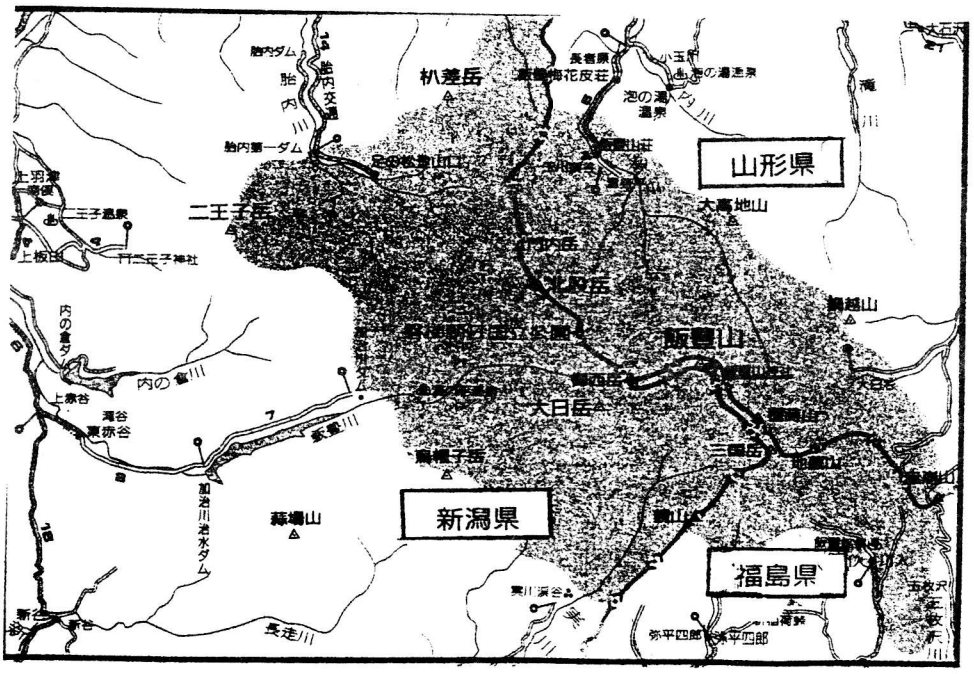
6期　合津　尚

飯豊山は白山と同じく信仰の山である。山頂は山形・新潟県に挟まれているが吾が故里福島県領である(添付地図参照のこと)。この勢力範囲は戦国期・会津藩の元祖蒲生氏郷の時代に、山岳修行の山伏が蒲生氏の寄進で 2,105 Mの山頂に神社を建立したのがそもそもの起因とか。会津側からの登山道がこの神社へのアクセスとして権利が残り、明治に入ってから県境確定においても敵であった薩長政府のもとで、会津藩から福島県に引継がれたのが奇跡であった。

古来、各種の生物は縄張り争いというＤＮＡを引きずっており、この変則的な境界を巡ってもその後三県で紛争が続いた。

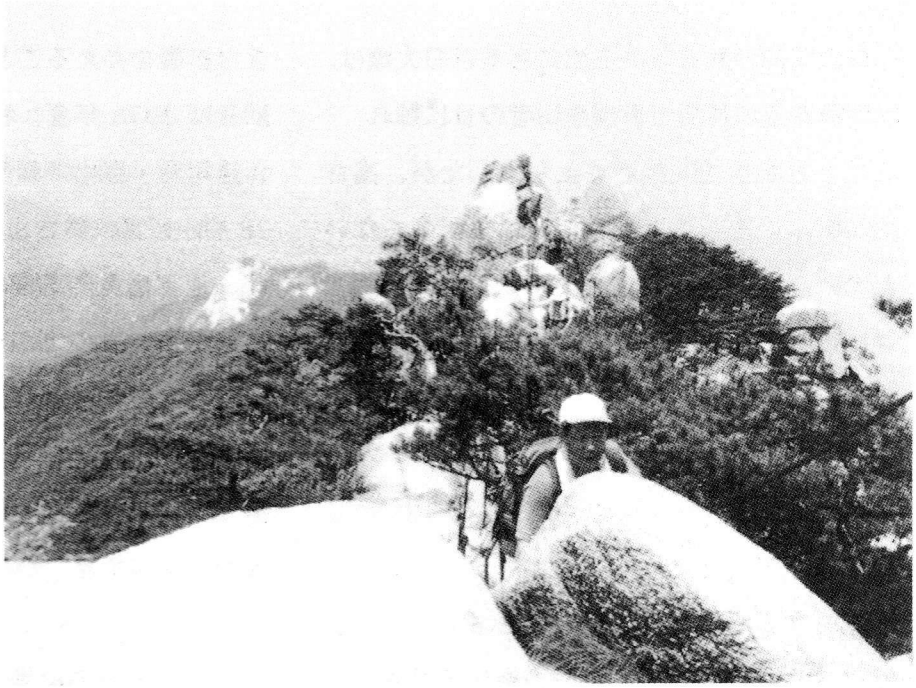
さて前置きが長くなったが、この山に登る計画が最初にあったのが高２のときであったから、今からおよそ５０年前の夏である。天候か受験競争の由かは失念したが中止となったままになった。昨年、７年に及ぶ岩手県釜石と東京の二重生活の間に主な東北の山は登ったので、昔の仲間とこの山に挑戦したが、悪天候や諸々の事件で中途半端に終わってしまった。

今年こそはと準備万端整えて梅雨明けを待ち、７月２３日から出入り５日間で山形県側から会津に 2,100 M級の北股岳・大日岳・飯豊本山と縦走しが、残念ながら有名な大雪渓は春からの異常気温で痩せ細り入渓禁止であった。その後の新潟県での雪渓崩落事故を思うと無理をする歳でもないし、二重生活も終わりそうでヤレヤレである。



北漢山・トボン山（韓国）山行

９期　山中重夫



元気に鎖場を行く山中さん。ふだんの八王子での生活では、金沢が舞台のテレビのサスペンス劇場などは必ず見ていてくれるそうです。

ソウル山岳連盟からのお誘いを受け、東京都山岳連盟の２０数名の一員として２００４年６月３日~６日までとして韓国の２つの山行報告をします。

いずれの山も 800 メートル程度の山で日本では、六甲・高尾山程度の山でソウルの近郊で地下鉄での日帰り参考が可能な山である。しかしその山様は、日本と全く異なり巨大な岩稜で覆われている。それ故道は、急登で随所に立派な鎖が付けられ標高以上の苦労があった。北漢山の横にはインスボンという韓国のクライマー垂涎の岩山があり頂上からクライミングの様子が手に取るように見える。また、山の中腹には、お寺や、万里の頂上を小型にしたような城壁が続き、山頂には韓国旗がたなびいている。

また、これらの山域は、国立公園であり登山口は、市民の憩いの場として整備され山用品の店が多く並び、山域全体が禁煙で喫煙が見つかると処分を受けるとのこと。

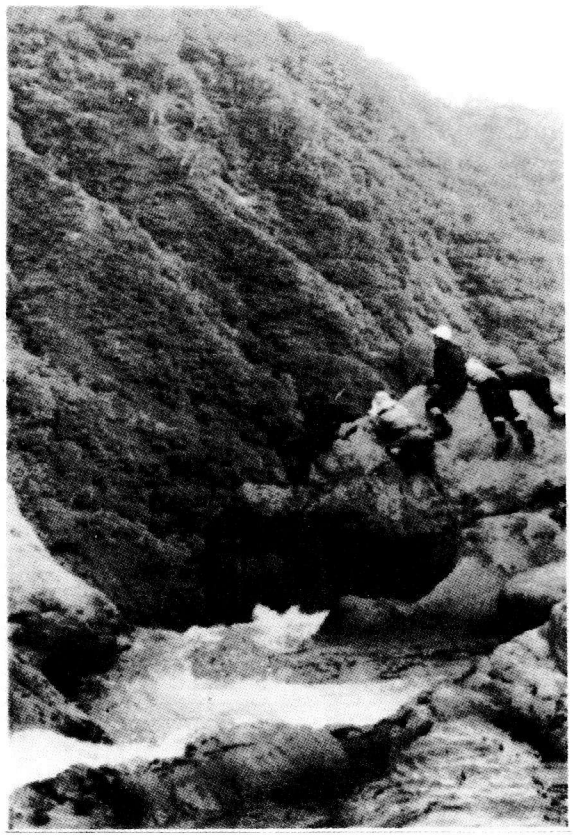
また、韓国の若者の間では、大変な登山ブームでソウル市内のある一角では、登山用具専門店が店を連ねていた。我々の団体が平均年齢６０歳を超えていた事に、ソウル山岳連盟は、恐らくビックリしたに違いないが、日本でいう「山渓」の取材も受け写真も掲載されるとのこと。

姿を変えた百四丈滝（ひゃくよじょうのたき）

15期　上馬康生

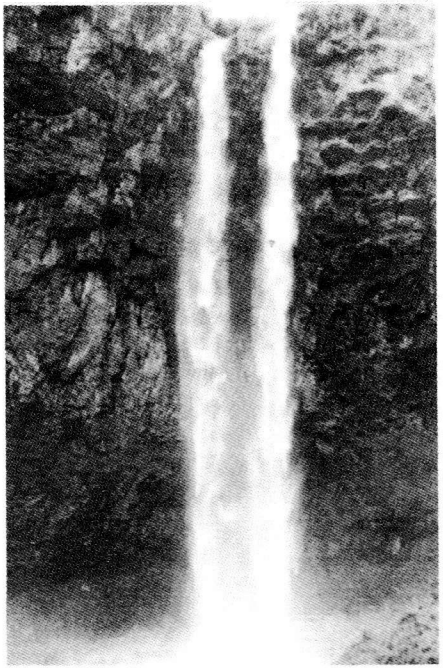
白山北部の丸石谷川上流にある百四丈滝は、加賀禅定道の復活で再び登山者の目に触れることとなり 20 年近くたちましたが、高さ約 90 mのその雄姿を見た人はまだ多くないと思います。その滝の落ち口へ、2004 年 8 月 2 日に行ってきました。メンバーは 11 期の森川 功さんと A.Y さんとの 3 人で、私としては今回で 5 回目の訪問でした。

振り返れば、大学 1 年の 1970 年秋、はじめての PW がここでした。リーダー 11 期の加藤忠好さんに森川さん、高田訓子さん（13 期）、矢津早苗さん（14 期）、南保昭雄君（15 期）との 6 人でした。その後の私の山行に大きな影響を与えることとなった PW でした。2 回目は 1973 年夏、私がリーダーで、17 期吉田憲司君・恵比寿泰子さん・川瀬さと子さん、18 期川西喜代美さん・黒田伸之君の 6 人でした。地下足袋に草鞋の沢歩きの格好で、滝の落ち口の大岩の上から滝の下をのぞき込むメンバーの姿が思い出されます（写真 1）。3 回目は 1974 年、一人で滝の下から左岸をよじ登って滝の落ち口へ行きました。4 回目は加賀禅定道ができてから T.S 君と 2 人で行きました。



1973. 8. 7 滝の落ち口の大岩からのぞき込む

古白山火山の溶岩にかかる滝は、長い年月の間に何度か姿を変えたことと思われます。1785 年の金子有斐の登山紀行「白山遊覧圖紀巻之一」には、觀千丈瀑布。望東方草蒼靄中。石壁若擘。一條瀑布掛其際。とあり、そのころは千丈滝と呼ばれていて、流れが一筋であったと思われます。同じ作者の「白山史 五溪瀧譜」には千仭瀧として、一條白練‥とありますが絵図があり、滝は一筋のようにも見えますが、左岸側の大きな流れと右岸側に小さくて途中ですぐ前者と合わさって一筋となっているようにも見えます。辰口町所蔵の 1789 年に描かれた白山曼荼羅図には一筋の流れとして描かれています。白山を描いた画家、玉井敬泉の 1940 年の絵図には千仭ノ滝として、滝の上の大岩の両側に 2 筋の流れとして描かれています。左岸側が大きく、右岸側が小さく描かれています。どうやら百四丈滝と



1974. 7.28滝の下から

呼ばれるようになったのは、1900年代中ごろ以降ということになりそうです。私が知っている1970年から少なくとも1974年までは、落ち口の大岩で2つのほぼ同じ水量の流れとなって下っていました（写真2）。ところが加賀禅定道が再開された1987年には、滝はまた一筋となっていました（写真3）。4回目の訪れで、落ち口の大岩が落下して無くなり、流れが一筋となったことがわかりました。

私の推測では、初め一筋の滝であったのが、流水などに削られて右岸側に小さいもう一筋の流れができ、やがて少しずつ岩が削れ、左右とも同じ水量の流れとなり、そして最後に2つの流れの間の大岩が崩れ落ちてしまったと考えられます。冬季の凍結も大岩の崩壊に関係しているのかも知れません。もう昔のように、滝つぼの全体をのぞき込むことはできなくなってしまいました。山の大きな変化を、こんなにはっきりと知ることはあまりないことです。そのうち水の流れに削られて、滝の落ち口へも簡単に行けなくなってしまうかも知れません。昔、同行した皆さんに、まだ見たことがない方々に、3枚の写真で紹介します。

1987. 8. 8加賀禅定道、滝展望台から

八ヶ岳(赤岳)登山

4期　佐藤　秀紀

知人のH氏から一度八ヶ岳山麓清里近くにある別荘に来ませんか，とお誘いを受けていた．せっかく行くのなら，八ヶ岳に登って，別荘におじゃましたいと考え，9月の連休を利用して出かけることにした．八ヶ岳は多くの峰からなる山塊の総称であるが，通常八つの峰は南八ヶ岳といわれる主峰赤岳(2899)を中心とした険阻な岩稜を連ねる連峰をいうようである．今回選んだルートは，諏訪湖側のJR茅野駅からバスで美濃戸口(1490)まで入り，そこから6合目ぐらいにある行者小屋(2340)まで登って一泊し，翌日地蔵尾根を登って横岳と赤岳の稜線に出て，赤岳山頂に至り，その後反対側の県界尾根を下って清里に出る，という八ヶ岳主峰赤岳横断コースということになる．コース選定に当たっては下りを赤岳から清里への二つの尾根，新教寺尾根と県界尾根のどちらをとるかを悩んだが，インターネットなどの種々の体験記なども参考にして，少しでも安心度が高いように思え，時間も短い県界尾根を選んだ．いずれも頂上からの岩場はかなり厳しいようである．高いところにあまり強くないので天候が悪化した場合は美濃戸口の方へ戻ることも考えた．

9月18日

5:27金沢を特急「しらさぎ」で出発．7:28米原で新幹線に乗り換え，7:56名古屋着．8:28特急「しなの」で名古屋発．10:37中央線塩尻着，11:00鈍行に乗り換え11:40茅野に着く．

食事をと思ったが適当な店がなく，12:10バスに乗り，12:55終点美濃戸口につく．かなり登った感じである．終点にある八ヶ岳山荘にてカ

レーライスを食べ，登山届けを書く．

13:30，林道を歩き始める．ほぼ平坦なカラマツ林の林道を 30 分歩くといくつかの山荘を通って，最後の美濃戸山荘に着く．ここまでは自動車が入れる．少し雨が降り始める．雨具を着けて．いよいよ本格的な山道の南沢を行者小屋に向けて登り始める．それほど急登はなく谷川の流れに沿って霧雨気味の山道を歩いて，16:00，行者小屋に着く．歩き始めて 2:30．小屋の前にはテント場もあり，かなりの人が小屋の前のテーブルで食事をしたり，ビールを飲んだりでにぎやかである．受付を済ませると寝る場所に案内された．２階の屋根裏で寝る場所としては十分広い．早速下に下りてテラスで生ビール(800円)を飲み，持ってきたブランディで水割りをつくり，ガスで上がみえない山を眺めながらのんびりと飲む．

食事は６時くらいから始まる．食事時には隣にやすむことになった人や見知らぬ人達と四方山の話をしながらひと時を楽しむ．明日の天候が心配だ．７時過ぎには布団に入り，寝てしまった．夜半目が覚めたが，朝方比較的熟睡感で起きることができた．

９月１９日

5:30 より食事．トイレ（水洗できれい）を済ませ，6:25 出発．ガス．小屋の後ろから登り始める．アルミ階段や鎖場があるがそれほど強い緊張感はなく，7:11，稜線の地蔵の頭に出る．かなり登山者は多く，降りてくる人に多数出会った．風は強く，依然としてガスで視界はほとんどない．7:15 展望小屋に着く．小屋で電話が利用できるかたずねるが，駄目ということ．小屋で少し休憩してガスの中を頂上へ向かう．途中，急登の鎖場があるがガスで周囲が見えないこともあり，それほど緊張感は覚えず．山頂小屋を通って，7:56 赤岳山頂に至る．登りはじめより，1:30．ガスで何も見えず，風強し．写真だけとってもらい早々に山頂小屋に入って休憩する．山頂小屋にはカード式の電話があり，迎えにきてもらう知人に連絡する．小屋で熱いコーヒをもらって暫し休憩する．小屋の窓から見えるものはただ白いガスばかり．休憩のみ２００円とあった．

9:05 山頂小屋を出発．いよいよ問題の県界尾根の下りである．鎖場が連続する．ガスで下のほうが見えないのが幸いである．途中で鎖場が途切れるところがあり，これで岩場は終わりかと思ったが，そう甘くはなく，さらに長い鉄梯子，そしてかなり長い鎖場があった．霧雨で岩場がぬれていることもあり，三点支持に注意しながら慎重に下る．約１時間２０分，10-6 と記した標識に至ってようやく岩場は終わる．頂上小屋で仕入れた缶ビールを飲んで一休みする．こちら側のルートはほとんど人が通らない．その後ダケカンバ，オオシラビソの樹林帯の山道になる．途中にオオシラビソの枯れた木が多く見られるところがあり，行く手下方向にはじめてガスがはれて稜線と小さなピークが見えた．11:20 小天狗というところか，10-4 とかかれた標識と

清里分岐の標識のあるところに至る．しばらく休憩．分岐と書かれているのに，分岐道らしいものが見えないので，いま少し下ってみるが分岐はわからない．元に戻り，標識の裏あたりをみると何か谷側に下る道らしきものがありそうな気配である．しかし，明確な道ではない．ここで，もう少し慎重に元の道をさらにしばらく下ってみればよかったのであるが，分岐と書いてある標識にまどわされて道を間違ってしまった．もう少し丁寧な標識が必要である．11:40 明確ではないが道らしいものを少し下がると，缶詰の空き缶らしいものなどが落ちている．やはりこれでよいのかと思いながら少し下るとかなり下まで瓦礫で埋まった開けた斜面に出た．道を間違えたように思ったが登り直すのはしんどいし，これを下れば結局谷川にでて，それを下れば登山口に出るはずだからとどんどん下った．.最後は笹薮をやぶこぎして，谷川の堰堤までようやく出た．堰堤が続くがその横に工事用の以前の道らしいものがあり，それをどんどん下って，12:22 ようやく本当の登山口までである．休憩．ここで，下から上がってきた犬をつれた中年夫婦と出会い，小天狗までの時間を聞かれる．下りで出会った人達はこれ以外に二組である．これからの道は広く堰堤に沿って下る．川を渡って 12:53 自動車道路にでる．車道を歩いて，サンメドウススキー場レストハウイスに 13:09 到着．ここより，知人に電話して迎えに来てもらう．その間，ワイン小瓶を買って長かった今日の山越えの無事を独り祝った．

特別寄稿

近畿OB会の歩み
8期 篠島益夫 徹底レポート

晩秋・多紀連山ＰＷ（15期・宇野　潔）

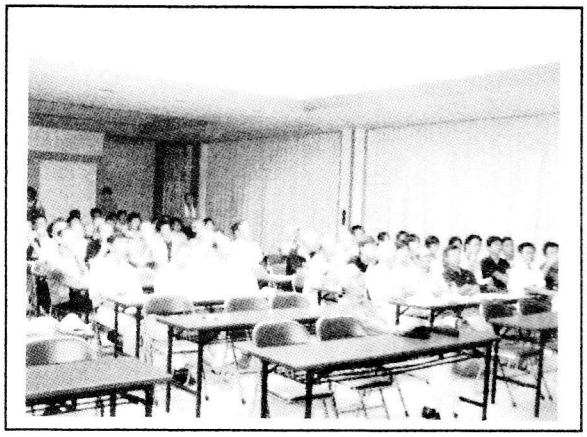
近畿ＯＢ会の歩み

報告者　８期　篠島益夫

16年１月より近畿でのＯＢ交流の機会つくりが定例的に出来るようになってきましたが、その経緯と今までの活動状況をやまざと紙面を借りて紹介させていただきます、本拠地金沢以外にも各地で活躍のＯＢの皆さんがその地域で纏まって、支部活動的にＫＵＷＶを縁とするグループ活動が盛んになり、ネットを通じた情報交換でエリアを越えた参加も出来る、そのような交流がますます盛んになる事を祈りつつ。

４５周年白峰総会と兵庫ＯＢ会の準備――15年９月13-14日

現役の支援のもと２日間にわたり白峰の白山まるごと体験村で開催されましたその折、兵庫から参加のメンバーがＯＢ会の兵庫版の活動が出来ないものか、と言う軽い相談をしました、これが契機となり、その後、言い出し兵衛の8期篠島、11期加藤、15期宇野が取り敢えず世話役として、兵庫会の初会合に向けての準備をはじめました、名簿確認、運営方法、初会合など10月から12月にかけて３回の会合を持ちながら、12月中には兵庫県在住２６名のＯＢの方へ趣意書、初会合を兼ねた案内を送付、返信、近況確認までを実施しました。



４５周年記念総会
白峰・白山まるごと体験村

兵庫会の発会式――16年１月24日・快晴・企画世話役（篠島、加藤、宇野）

今後の方向性について提案・協議

１、５月には「ベルクハイムと高三郎」を企画する

２、組織は設けず、会費も都度コスト見合いとして、今回の世話役が当面は引き続き世話役をつとめる

３、「ベルクと高三郎」の案内にあわせて、今後のｲﾍﾞﾝﾄ情報提供希望者を確認し、その希望者を活動会員として今後のｲﾍﾞﾝﾄ案内を行う

4、世話役・会員が企画者となり、ｲﾍﾞﾝﾄを計画し、自ら案内、ｴﾝﾄﾘｰの募集を行う

5、兵庫会では活動人数が限られるので、大阪府、京都府、奈良県在住者も加えて情報希望者を募集して近畿会として活動する（その後、滋賀県の横山岳ＰＷを企画する折に滋賀県在住ＯＢにもＰＷ参加と今後の情報希望者の確認をおこなっています）

六甲山上・ホテル・ド・麻耶

参加者―11名
8期　黒崎、篠島
11期　加藤・夫人、畔山・夫人
12期　野村、矢崎
14期　楠屋
15期　宇野、金井
内容
趣旨説明・今後の方向性
45周年記念ＶＴＲ上映
記念ウオーク（山上―新神戸）

4月ｲﾍﾞﾝﾄ「加西市・鎌倉山ＰＷ」―16年4月10日・快晴・企画担当11期加藤

集合：９：１０　ＪＲ加古川駅
参加者―１３名
6期小川、8期黒崎、篠島・節子、10期藤井、11期加藤・智美、12期野村、赤地、14期楠屋、15期宇野、高村、16期川端
コース：満開の山桜、みつばツツジに迎えられて河内地区をぐるりと囲む修験道の道、一周以上４２０度廻る6時間のコース、好天の暑さもあり、想像以上のトレーニング
汗流し：加西市・根日女の湯

鎌倉山頂上

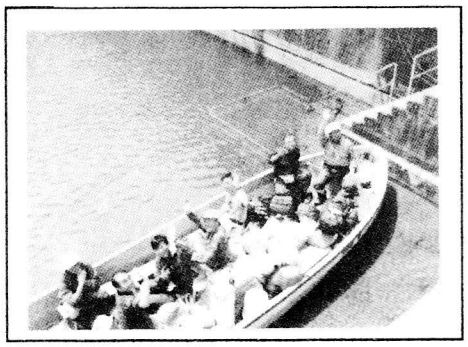
出発10時30分、鎌倉山頂上15時前
普光寺下山口16時３０分
根日女の湯解散18時

5月ｲﾍﾞﾝﾄ「花と残雪のベルクハイムと高三郎」
5月1日（晴）2日（快晴）3日（曇）・企画担当15期宇野、舟田、在金沢ＯＢ
いよいよ期待のイベントであるが、2泊３日の事もあるのか、近畿会参加者は7

名と少ない、本部ＯＢ会としても合流型「春の小屋酒場」、「小屋作業」も兼ねてとして実施されましたが、在金沢ＯＢの支援、協力あればこそ、近畿会としても素晴らしい形で実現出来ました

集合：金沢大学小立野キャンパス・5月1日　AM１１：００
参加者：0期田村、4期佐藤、8期篠島・節子、11期加藤・智美、矢崎、森川、長岡・夫人、13期吉田、辰野、15期奥名、舟田、高村、坂尻、宇野、16期北川、20期久富　合計19名

犀川ダム出発（5月1日）



山下ボートで２往復
食料＋小屋資材＋人

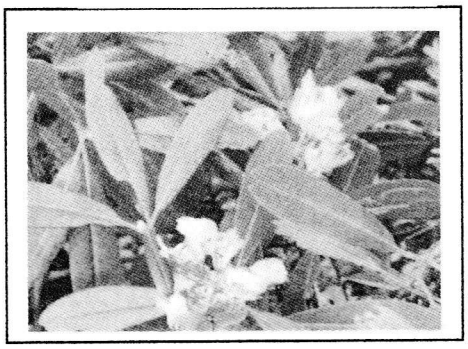
ベルクハイム・金沢の宴（5月1日）

豪華かも肉じぶ煮までそろう金沢の味

全員集合（5月2日）

起床４：３０、高三郎へ出発
５：３０（出発前）

新道尾根（5月2日）



かたくり、いわうちわ、たむしば
うわずみ桜なども真っ盛り

高三郎頂上（5月2日）

5月3日はベルクハイムを後に花を楽しみながら、ダムサイトまで歩行、犀川ダムで解散式、懐かしさと感動に満ちた３日間でした
ベルクハイム、高三郎、仲間たちよ、また会う日まで

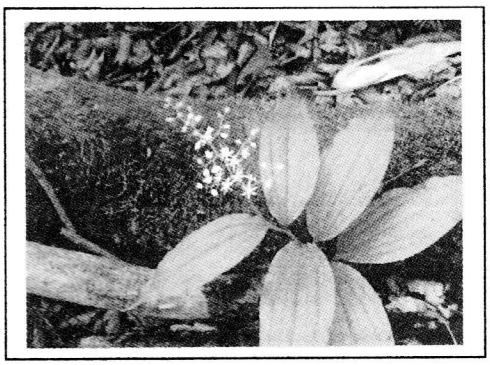
5月ｲﾍﾞﾝﾄ「花を求めて・湖北横山岳ＰＷ」――5月２２日・晴後雨・企画担当
8期　篠島益夫

集合：長浜駅８：００、白谷登山口駐車場９：００
参加：6期小川、8期伊豫、篠島・節子、10期藤井、伊予敦子
11期加藤智美、12期野村、15期高村、合計９名
出発９：１０　本命の白谷本流コースが林道工事の影響で急遽、避ける事に、回り道の東尾根コースで登る事に、村人の軽四トラックに拾われたり、迂回コース登山口を見落としたりのトラブルが続き、東尾根に取り付いたのは10時、取り付きから標高７００ｍくらいまでは道の整備も悪い上に急登の連続で疲れる、その上はブナ純林に変わるが花らしいものは早咲の「ぎんりょうそう」くらい

東峰頂上・標高 1131m・到着 13:00

伊吹山、金糞山、冠山
能郷白山の眺望

東峰―主峰縦走路



ゆきざさ、ちごゆりは満開
さんようか、いわかがみ、いわなしが残る

主峰・標高 1132m到着：14:05

五銚子の滝

主峰から下山を始めた頃から雨模様に、主峰からの急降下はすごい、五銚子の滝では雷雨にたたかれる、小ぶりになるのを待って進むが沢が増水して登山道があちこち水没、そのうち水の濁りも落ち着いてきたので一安心、途中はヒメレンゲの黄色い群落、たにうつぎのピンクの花などにであいながら、沢沿いの白い匂の花の中を下山、主峰出発 14:20 で白谷駐車場到着 17:10 の下山もやや難コースであった

6月ｲﾍﾞﾝﾄ「あじさい六甲ＰＷ」――6月27日・一時雨後晴・企画担当

15期　宇野潔

集合：9:30　北神急行谷上駅

参加者：6期小川、8期篠島・節子、10期藤井、11期加藤・智美、
１２期赤地１４期赤地喜久子、15期金井、宇野、高村　合計１１名

山田道・丸山谷橋上の参加者

天気は自信なさそうな気配であったが、この橋を超えたころから、ポツポツときた、あじさい見物には悪くないかも、土曜日の予定を天候の関係でこの日曜日に一日順延したので、赤地夫人も初参加、他にも土曜日を避けた開催希望が出ている

あじさい園・全員集合

あじさいについて自然観察員の説明を聞きながら園内をまわり、六甲生まれの「しちだんか」に加えて品種や原産地までだいぶ知識が増えた、原種の山あじさい、浜あじさい、蝦夷あじさいから、うつぎ、手まりの類まで仲間は多いようだ

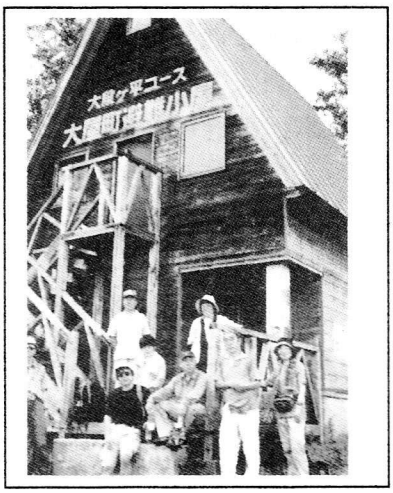
シアトルの森・大休憩

赤地さんのチャイナ衣装持参で盛り上がる、普通は気はずかしいが遠慮なく着てみる、周りのわれわれのグループ以外の人が遠慮していなくなる始末、あずまやがＫＵＷＶ専用になった

この後、六甲森林植物園からトエンテイクロス道に入り、布引貯水池、布引の滝を経由して新神戸駅へ下山、到着解散は17:30頃

7月ｲﾍﾞﾝﾄ「兵庫の高峰・氷の山ＰＷ」——7月２４日・晴一時雷雨・企画
担当・8期　篠島益夫

集合：播但連絡道和田山ＩＣ降り口
参加者：6期小川、8期篠島・節子、10期藤井、12期赤地、野村
15期宇野、高村、23期高橋　合計９名
コース：大屋町市街地 ═══横行渓谷═══ 大段ヶ平（ここまで車）
————大屋町避難小屋 ————神大ヒュッテ——— 古生杉 ———
—— 古生沼——— 頂上(往復とも同じ)
所要歩行時間：登り１時間４５分　下り１時間15分



大屋町避難小屋

氷の山頂上・展望台

あじさい絵コンテスト表彰

西から急に雲行きが怪しくなったので、屋根付き、壁付きの展望台に陣取る、頂上の登山者は下りはじめた人が目立つが此方は夕立をやり過ごす積りで昼食、藤井さん特製のコーヒー、赤地さんの先月宿題の六甲あじさい絵コンテスト表彰などで過ごす、やがてすごい雷雨となる、やり過ごして正解だった

帰路に立ち寄った不動滝

若杉高原温泉・汗流し・懇談

今回の山行きは下りてからが忙しく、赤地さんのベトナム仕入れの不動滝でのアオザイ試着、若杉高原温泉での汗流しと懇談など盛り沢山であった、このコースでの氷の山は体力的に楽であり、皆さん余裕があったのでは

9月ｲﾍﾞﾝﾄ「秋刀魚パーテイ・明石百草園」――9月２５日・快晴・企画担当
11期　加藤忠好

集合：ＪＲ神戸線・大久保駅　　11:00
参加者：5期金岩、6期小川、8期篠島・節子、10期藤井、11期加藤・智美、長岡、12期野村、赤地、15期金井、宇野、間所、高村　合計14名
ところ：明石百草園（今月の企画者、8期加藤さんの大きな屋敷）

8月のｲﾍﾞﾝﾄ計画はなく、2ヶ月振りのｲﾍﾞﾝﾄであり、参加者も多目の14名、折角の秋晴れであるが伝統の山登り、ウオーキングは無し、食事の秋を満喫した1日で、準備を兼ねて10時頃から集まりだし、加藤家を後にしたのは夜の8時を過ぎていた、会費で準備したメニューの他に、秋の味覚や高級和菓子、洋菓子、アルコール、遠くは会津の田村さんの送ってくれた酒まで昼から夜まで食べ続けても飲み続けてもまだ消化しきれないボリュウム、焼き物に使った炭の量も半端では無かった、此れが出来るのは設備が整い、広くて付近に遠慮の要らない百草園ならではのｲﾍﾞﾝﾄであった

秋の味覚、秋刀魚、マツタケ、栗サツマイモ、とうきび、梨、柿など誰も調整しないのに二重寄りする事もなく、以心伝心かＯＢ会のフィーリングが合ってきたのか

台湾民謡の練習開始、常に飛び入り企画の赤地さんのお陰でＯＢ会は常にアイスブレーク、初参加の5期金岩さんもビックリでは

１０月、１１月、１２月企画打合せ、企画担当も世話役以外に広げ、小川、赤地企画も、
１０月は雪彦山、１１月多紀アルプス、
１２月は生駒越と大阪日本橋での忘年会に決定

１６年１月９月までのｲﾍﾞﾝﾄ８回の活動状況まとめ

・ 近畿在住ＯＢ（大阪、兵庫、京都、奈良、滋賀）の人数　７９名
・ 近畿ＯＢ会での活動意向メンバー数　２８名
（ｲﾍﾞﾝﾄ案内対象者）
・９月までのｲﾍﾞﾝﾄ参加者数　２０名
・９月までのｲﾍﾞﾝﾄ参加延人数　７２名

活動意向メンバー２８名を増やす為１６期以降のメンバーへの参加促進や活動メンバーの中での参加０の８名の参加対策など、かなりの工夫が必要と見られます、尚この数字には近畿エリア外から、近畿のｲﾍﾞﾝﾄに参加された人数及びその逆も除いています

報告終わり
平成１６年９月２６日
８期　篠島　益夫

近畿KUWV-OB会　11月例会

多紀連山PW(2004年11月27日)
～皆な元気だ!? エネルギッシュだ!? パワフルだ!? ～

大たわ駐車場を出発

三嶽三角点付近

小金ケ嶽へ登りなおし

大たわ　役の行者

小金ケ嶽　北壁

登山口へ帰着
樹齢 600 年のサザンカの前で

野沢温泉スキー合宿０４報告記

人生は、スキーとともにある。
野沢温泉スキー合宿は、生きる証を確認する行事である。
年とともに、スキー技能のさらなる向上を確認するとともに、
新たな課題を見つけることが、人生へのエネルギーを生む。

世話人：青柳（１１期）　森川（１１期）
田村（０期）・柴田（８期）・保田（９期）・上村（１１期）・加藤（１１期）・片田（１１期）・小山（１１期）
・芝田（１１期）・守内（１１期）・辰野（１３期）・上馬（１５期）・宇野（１５期）・舟田（１５期）

■青柳さんには「カービングらしく滑ったら？」なんて、今回もアドバイスされましたが、私自身は、今回はスカイラインを余裕最速で降りられたし、夕方には筋肉痛で足ヘロヘロが二日目も大丈夫…靴前に体重を掛けることを覚え、自覚できる進歩があったんで満足できましたです。ハイ。

■潔君へ　五体満足で帰れましたか？スキーは、スピードが伴い、スキー場へ通わなければ上達しないスポーツだから、環境がものをいいますね。遅くに始めた事例も聞くけれど、その場合も、場数を踏むのが必須になります。私は制御出来るスピードまで。そして、雪国であるから、「やりたい」の気持ちを維持していないと、家に篭もる方にベクトルが動いてしまうから…

■3つか4つ温泉をはしごしたのですが、服を脱いだり着たりするのがとても面倒。水着のままで移動したい気分ですね。

■どれもいいお湯でしたが、1つ、かなり熱いのがありまして「そっとしてろ」「お湯を動かすな」という指示がでます。体の表面のお湯は体温近くまで下がるので液流がなければあまり熱く感じません。それと、皆で入ると人間の体はけっこうな熱容量なので湯温も下がります。というわけで、「ほーいい湯だった」と上がるわけです。

■だが、天は予想もつかない仕打ちで試練を与えた。それは、完璧な晴天ながら、ゴンドラを止めた春3番の強風と翌日再びゴンドラを止めた、台風なみ低気圧による大吹雪だった。お陰で、野沢最良のトレーニングバーンであるやまびこゲレンデは、21日の午後に滑れたのみ。また6キロのダウンヒルで実力を試せるスカイラインコースも、わずか4回の滑降に留まったのだった。

■今回の野沢では、新カービングターンの完成を果たすことは出来ず、フェーン現象によるベタ雪と、ブリザードによるアイスバーンと新雪は、より力強いエッジングとバランス良い体重移動の必要性を突きつけ、新たな課題を与えたもうたのだった。

■ただ、猛吹雪下のスカイラインコースの滑降では、スピードに負けず恐れることなく斜面に突っ込むことができ、壁を一つ越えられたと実感できたことは、大きな収穫であった。

■田村さんと舟田さんには、ワザワザそのためのユニホームを用意され大サービスをして頂きました。ワインシュタイン田村によるDr. 野口のフラスコ吟醸酒は抜群の美味しさ。着飾った節子大宗匠のお手前の素晴らしさに感嘆し、スキーの疲れも癒されたのでした。

今年もやって来た！！
野沢温泉スキー合宿０５ 予告

——NEW！！ オフピステのブナ林の滑降——

自然のままの斜面

日　程●２００５年２月２６日（土）～２７日（日）（前後いづれか延長して、２泊３日がお勧めです）

場　所●いつもの　野沢温泉スキー場＆共同温泉浴場１３湯

宿　泊●いつもの　リゾートハウス　ふるさと　（宿泊代は、一泊２食付　約８０００円）

長野県下高井郡野沢温泉村６５５６　　電話　０２６９－８５－２２４１

幹事長●１１期　森川　功　　同代理　青柳健二

2005スキー合宿のモットー●
「人に優しく、自然に優しいスキー！！」

申し込み●２００４年２月６日（日）までに

Ｅメール／電話にて、上記　幹事長／同代理へ申し込み下さい。

KENAOYAGI@aol.com　（青柳）　048-481-0275

isaom@bl.mmtr.or.jp　（森川）　594-22-0353

※和室２部屋を確保していますが、家族参加の場合は別室を確保しますので、その旨申し込み下さい。

※野沢温泉スキー場、リゾートハウスふるさとの情報は、各ホームページを参照して下さい。

（本日の積雪情報から宿の場所まで確認できます。）

http://shinshu.online.co.jp/nozawa/　　http://www.nozawa.com/furusato/

【世話役・青柳氏のひとりごと】

「新潟中越地震の被災者を温泉に招待して力づけた野沢温泉の意気を称えたい！！」

「野沢温泉スキー場の魅力は、抜群の雪質と多彩なゲレンデ、全長６キロのスカイラインコース」

「毛無山山頂からのスキー専用ゲレンデやまびこコース、

そして新たに、オフピステのブナ林の中の滑降ができるようになったそうです」

「ＯＢ合宿の楽しみは、なんといっても、加賀の姫様の御点前によるお茶会と、

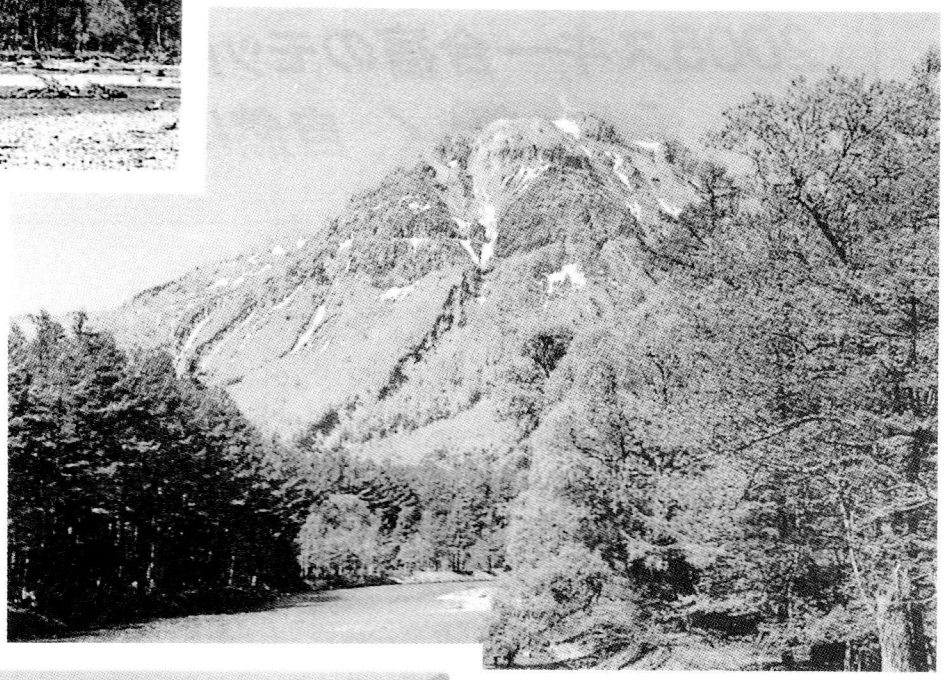
合津のワインシュタインのワインと語りを肴にした楽しい酒宴」

「さらに、さらに、かけ流し１００％の天然温泉の共同浴場巡り」

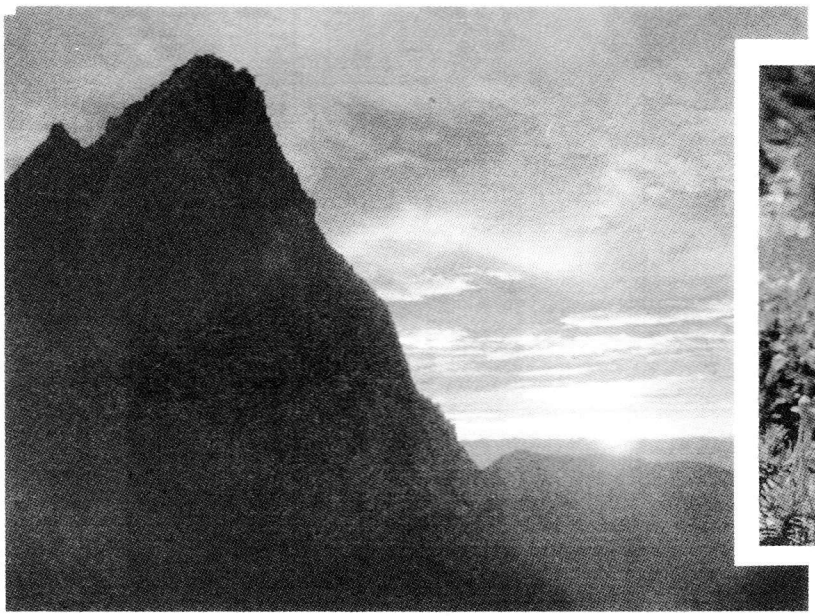
多数のご参加を期待していま～す！！

やまざと写真館

8期　柴田 勝之



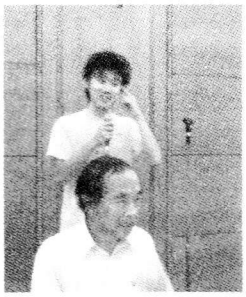
11期　青柳 健二



前田先生法学部長お祝い会

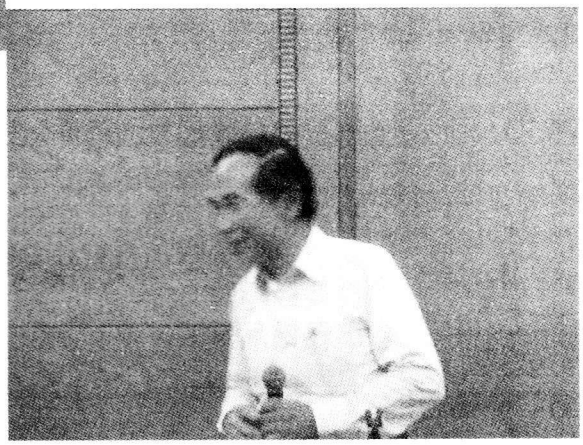
日時　２００４年7月３日（土）１９：００～
場所　金沢日航ホテル　5F「オーキッドルーム」
出席者　前田先生、奥名(15)、舟田(15)、栂(19)、久富（20）、深田(20)、大野(21)、栂(21)
森(22)、名倉(23)、鳥越(23)、中川(23)
荻田（４回生）、池田（４回生）、岩田（４回生）、敞田（４回生）
三田村（３回生）、竹内（５回生）

プログラム
１．開会挨拶
２．乾杯　久富
３．参加者自己紹介
４．お祝いのメッセージ
奥名、舟田、栂、三田村
５．前田先生へのQ&A
６．記念品贈呈　　大野直子事務局長
７．前田先生挨拶
８．中締め　　OB会役員　　深田さん
９．閉会挨拶



前田先生へお祝いの言葉を述べるみなさん。先生がいかに長い間 kuwv に貢献されたかがうかがわれます。

歓談のひととき　　山の話や、よもやまばばしに花が咲きました。



クラブを卒業して二十数年・・・・。
こんな時期に、こんな楽しいひとときを過ごせる
なんておもってなかったです。
前田先生もみんなも
一人一人がその人らしさを熟成させながら、
時間が流れてきたんだなあ！
ワンゲル OB クラブに入ったみたいでした。
現役の人たちも、すぐそこに感じてしまった。

ちょっとだけ満月の月とは違うように見えるのは
酔いのせいかなあ・・・と
月を見ながら家路につく私でした。
十六夜の月だったのですね。
うれしい夜でした。

（森　恵利子）

デジカメの腕が未熟ですみませんでした。
写真・編集　　栂　睦美

ＯＢ会会計報告

（平成15年9月1日～平成16年11月30日）

【収入の部】

OB会費納入	1,775,000
寄付	10,000
45周年総会懇親会残金（下記）	25,981
預金利息	1
計	1,810,982

【支出の部】

OB会報（やまざと）No.18印刷費	88,000
郵送費	94,320
小屋酒場備品代	43,942
小屋酒場食費	31,887
小屋酒場諸雑費	15,700
前田先生法学部長就任お祝い会補助	29,284
役員会議費	6,489
事務備品費	27,349
その他	1,050
計	338,021

【差引剰余金】

前回（15.8.31）繰越金	353,785
収入の部	1,810,982
支出の部	338,021
差引合計	1,826,746

○45周年記念総会・懇親会収支

《収入》

参加費	993,000

《支出》

カップ代	428,560
コテージ代	201,600
食料、酒代	167,218
2次会（小屋酒場）費用	23,741
雑費	9,812
連絡費	13,082
役員会議費	13,731
現役とのご苦労さん会	99,275
中村氏への花代	10,000

《残金》 OB会会計へ入金（上記） 25,981

OB会費ご協力のお礼

OB会費ご協力どうもありがとうございました。この場を借りて改めて御礼申し上げます。

（順不同、敬称略）

仙田　厚太郎
岩井　修
江竜　喜史
安藤　道子
北　正昭
鈴木　兵一
田村　昭夫
登内　郁夫
西尾　皓史
下出　明憲
高田　昌嗣
森島　稔
佐藤　秀紀
亀田　武
川島　勇
久島　俊也
池田　進
石橋　毅
今井　春昭
上野　善美子
大崎　進
小川　修司
清野　邦弘
合津　尚
小松　武文
飯田　利之
大磯　岩雄
四十万　利之
中山　美津枝
村田　泰恵
穴田　昭一
伊豫　欣二
黒崎　史平
篠島　益夫
柴田　勝之
松浦　昌孝
柳川　徹
山村　嘉一
伊藤　博道
上島　嘉美
清水　一
谷道　正晴
鍋島　武
服部　千章
山中　重夫
吉田　幸造
木津　治男
白石　淑子
寺本　典生
藤井　直樹
吉野　和彦
青柳　健二
畔山　宏次
石田　清久
加藤　忠好
小山　清
芝田　真
長岡　正利
守内　成一
森川　功
矢崎　利哉
小西　外士郎
津田　伸生
西田　一秀
野村　益己
伊藤　純治
大島　良治
柴田　茂樹
辰野　隆義
橋正　徹
南　梅子
吉田　穂積
吉本　良治
神林　博
清家　雅幸
仁藤　早苗
上馬　康生
宇野　潔
奥名　正啓
金井　澄
祖父江　直久
佐野　哲雄
舟田　節子
増田　富雄
松下　重人
松林　知一
間所　新一
三宅　毅
金森　広
北川　隆次
小林　健一
塚本　克宣
中野　淳一
林　多喜王
山内　政司
山上　正彦
大家　慎一
川村　高弘
椚座　久子
小島　敬
藤井　芳治
渡辺　和文
坂井　尚登
田辺　隆一
津島　直也
堤　善朋
椿川　利弘
林　律子
藤森　忠夫
岡部　伸一
森　博彦
横井　恒雄
大野　政信
帯刀　圭子
辻　泰樹
栂　典雅
河嶋　敏郎
高田　泰夫
中村　元風
深田　進
石田　郁子
岡崎　秀二
加藤　万里子
竹内　和彦
田坂　優好
谷屋　明彦
安達　敦子
黒崎　敏男
小林　正人
斎藤　剛
森　恵利子
石地　隆司
小久保　光将
興井　隆
小阪　陽克
鈴木　康之
高橋　智栄子
名倉　均
広岡　謙一
村井　匠
磯見　晃
広岡　悠子
荒戸　美雅
廣田　秀和
金山　裕之
高橋　伸治
難波　利行
藤枝　宏淑
赤堀　鉱仁
浅井　浩一郎
酒井　教雄
益川　珠美代
定田　誠
藤田　章三
畠山　潤
山口　雪枝
辻　白峰
土井　泰彦
米山　亮一
深井　嘉浩
真島　浩志
中村　哲也
野田　和裕
矢後　正弘
鮎川　剛
小島　裕子
樫村　美智子
柴田　祐介
若山　悟
三浦　永士
小西　陽介
西田　秀輝
長谷川　夏樹
杉村　明慶
福村　岳代
西　大輔

平成17年分のOB会費ご協力のお願い

OB会の運営は、OBの皆さんからの会費のご協力で成り立っています。OB会の趣旨にご賛同いただき、ぜひご協力をお願いします。

OB会費は同封の振込用紙または次の口座へお振込ください。
郵便局　00780-3-14120
北國銀行本店営業部　普通預金223703
どちらも、口座名は金沢大学ワンダーフォーゲル部OB会です。

※既に5年間の一括先払いをいただいている方には振込用紙は同封しておりません。

なお、会費は年間2,000円ですが、事務負担軽減のため、できれば5年間（平成16年～20年）の一括先払（＝10,000円）をお願いしております。

ＯＢ一言通信

- 役員の皆さんご苦労様です。どうか充分に楽しんでやって下さい。（６期　池田）
- やまざと楽しく読ませていただきました。ありがとうございました。（１７期　小島）
- いつもお世話いただいてありがとうございます。体力は落ちる一方、体重は増える一方で山から遠のくばかりですが、そのうち子供と一緒に白山に行きたいと願望だけは持っています。（２６期　山口）

- いつもご苦労かけ有難く思っています。新会長のもと、ＯＢ会が発展する事を祈っています。（１３期　大島）
- はや半世紀がたつとは。我々の時に１０周年記念をやり、創世期の先輩を訪ね歩き、ＯＢ会も本格的に出来、楽しみな「やまざと」もVOL.１８になるとは。継続は力なりか。一歩一歩ゆっくり歩いていきましょう。（１１期　矢崎）
- 新役員の方々がんばってください。（６期　合津）

- いつもお世話いただきありがとうございます。ワンゲルは、学生時代思い悩みながらも４年間続けた部活動であり、ＯＢとしてもかかわりをもちたい気持ちはあります。今は会社を辞めたりとまだ不安定な格好で、そちらへの時間的投資も出来ていませんが、いずれ何かＯＢ会での仕事もしたく思っております。（４３期　杉村）

- ４５周年おめでとうございます。旧役員の方々、長い間ご苦労様でした。新役員の方々、今後ともよろしくお願いします。（１０期　木津）
- 新しい役員の皆さんには、お世話かけますが、よろしくお願いします。（８期　穴田）
- いろいろご苦労様です。（１８期　坂井）
- いつものことながらお世話なさっている方々に頭が下がります。感謝の言葉も思いつきません。今後ともよろしくお願い申し上げます。（８期　山村）

- 新役員の方々、会のお世話ご苦労様ですが、どうかよろしくお願い致します。何の協力も出来ず恐縮です。「やまざと」を楽しく読ませて頂き、会報だけでの皆さんとの絆を嬉しく思っております。細々ながらでの継続を願ってやみません。（７期　中山）

- お世話になります。何も出来ず申し訳なく思っています。いずれ…（２６期　藤田）
- 楽しむ事が第一です。お互いに楽しむ事です。（１１期　守内）
- なつかしさと皆さんの元気が一杯つまった「やまざと」受け取りました。今後も期待しております。（２１期　石田）

・「やまざと」ありがとう。役員の皆さんに心から感謝しています。若き日の夢や情熱がよみがえってくるような気がして、いつも愛読しています。（１５期　金井）

・暮れには、カップありがとうございました。ワンゲルの思い出ともども大切にしたいと思います。（６期　上野）
・よろしくお願いします。（２０期　中村）
・役員の皆さんには、お世話をかけております。１１期の森川君の母校で仕事をさせてもらっております。９期の白井さんもお近くなのですが、ごくたまにしか会えません。東海地区の集いがあるといいですネ。（１０期　寺本）
・お手数をおかけしています。（２５期　荒戸）
・新役員の方々、肩をはらず、ゆっくりとやって下さい。（１３期　辰野）

・１１期加藤忠好　会費１万円納入いたします。また、残りの１万円は大崎進先輩がビデオ編集のお礼だと送金されましたが、私の方では困るので、大崎先輩からＯＢ会への寄付として扱ってください。（１１期　加藤）

・ＯＢ会新役員の方々、お世話何かと大変だと思いますがよろしく。（３期　西尾）
・１５期増田富雄です。後輩の皆様、頑張って下さい。（１５期　増田）
・２１期田坂です。よろしくお願いします。（２１期　田坂）
・世話のお仕事ありがとうございます。厳しい仕事の世界から離れ、老人の山を満喫できる体力づくりに励んでいます。今後ともよろしく。（６期　今井）

・「やまざと」１８号２７ページの“ワンゲルの卒業生は皆ＯＢです。”に感動しました。大学卒業以後、ワンゲルに関わることなく、日々の仕事に追われ、また、遠隔の地に居るので、つい心の片隅に追いやって来た記憶を呼び起こされました。（３０期　中村）
・ご無沙汰しています。お世話になるばかりで申し訳ありません。「やまざと」いつもなつかしく拝見しています。（１２期　西田）

・ＯＢ会の運営ご苦労様です。「やまざと」楽しみにしています。先日（1月２４日）、ＫＵＷＶ兵庫県ＯＢ会に、県外参加させてもらいました。加藤君の力作ビデオ「ＫＵＷＶ45年の歩み」に感動し、午後からは、摩耶山星の駅から新神戸駅までの下りのコースを楽しくワンデリングし、充実した１日をすごさせていただきました。世話役の篠島さん、加藤君、宇野さんに感謝しています。（１１期　畔山）

１６年２月５日振込分まで

ツマトリソウ

富山県白木峰にて　雲上の湿原を気分よく歩く梅夫妻

金沢大学ワンダーフォーゲル部ＯＢ会・会報誌「やまざと」VOL. 19

発　行　日■ 平成16年12月

発　行　者■梅　　典雅

編集責任者■大野　直子

印　　刷■プリントショップ多田

金沢大学ワンダーフォーゲル部ＯＢ会

事務局■〒920-0226　石川県金沢市粟崎町2-111

電話076-237-8706（大野直子）

E-mail　ohno@yu.incl.ne.jp

KUWVOB会 HP■ URL:http://www.asahi-net.or.jp/~aa4m-okn/kuwv/ob/

（15期・奥名氏が管理するホームページ。最新情報も得られ、面白いですよ！！）

梅　典雅 会長　E-mail　togatotoro@yahoo.co.jp

名倉 名簿担当　E-mail　nag@po3.nsknet.or.jp

振込口座■郵 便 局/00780-3-14120/金沢大学ﾜﾝﾀﾞｰﾌｫｰｹﾞﾙ部OB会

振込口座■北國銀行本店/普 223703/金沢大学ﾜﾝﾀﾞｰﾌｫｰｹﾞﾙ部OB会